国際研究論叢　23（3）：131～151，2010

研究ノート

マルコ・ポーロ写本（1）
― マルコ・ポーロの東方（2^{-1}）―

高　田　英　樹*

Manuscripts of Marco Polo's Travels（1）
― The Orient of Marco Polo (2^{-1}) ―

Hideki Takata *

キーワード
マルコ・ポーロ、写本、歴代カアン

0　はじめに

十九世紀末その大著によってマルコ･ポーロ研究の礎を築いたユールは、かの旅行記を「偉大なる謎の書」[1]と呼んだ。それは、存在したかすら確かでないその著者、本当かどうかも分からないその旅、誰によって書かれたのかも明らかでないその書、一つとして同じものはないといわれるほどにそれぞれに異なる稿本と、マルコ・ポーロにまつわる全てを指していた。

そして数百年を経た二十一世紀始めの今日、基本的にはなお「謎」のまま残っていると言ってよい。その間、ポーロの旅と書と当時の世界の研究は格段に進み、そこに記されてあることの事実であることはより多くまた詳しく証明され、かの書に対する信頼と評価はさらに高まっているが、その旅そのもの、すなわちマルコ･ポーロなる人物が長く東方に旅したこと、そして中国にあってフビライ･カアンに仕えたことなどを確固たる事実として証言する記録は、今なおヨーロッパにもアジアにも見つかっていない。そのことは、そこに書かれてある事ははたして本当にポーロの手になるものかとの根本的な疑いと結びつかずにはおかない。その疑いをさらに増幅させるのが、写本によりテクストにより大きくまた小さく異なるその内容と表現であり、とりわけ二つの系統のテクストの間の、誰の目にも明らかな大きな隔たりであった。

十九世紀始めマースドゥンやフランス地理学協会に始まり、バルデッリ－ボーニ、ポーチェそしてユールらに繋がる近代の研究は、各種の写本を校訂・刊行し、それらの中にマルコのオリジナルテクストを探求することによってこの問題に答えようとしてきた。しかしそれらが、単独写本の刊行かせいぜい数種類の稿本の対校、あるいは既存テクストとの対照にとどまっていたのに対して、ヨーロッパ各地に現存するほぼ全ての写本を調査し、

＊たかた　ひでき：大阪国際大学人間科学部教授〈2009.12.21受理〉

詳細厳密に対校・対照することによってそれら全ての系譜関係を確立し、テクストの成立過程に新たな説を打ち立てたのが、自ら校訂したパリ国立図書館写本 Ms.fr.1116に、その膨大にして緻密な研究「写本の伝統」を序に付して1928年に出版したフィレンツェの中世ロマンス語学者ルィージ・フォスコロ・ベネデットであった[2]。

それまでは、今あるごとく種々に異なる版が存在するようになったのは、1298年ジェノヴァの牢で編まれたオリジナルに解放後のヴェネツィアでマルコ自身によって、あるいは後世に写字生や編者が新たな記事を書き加え、それが次々と新たな転写本の中に取り込まれたためと考えられていたのに対し、詳細は後述するがベネデットは、現存する各種写本に様々に残っているほぼ全ての記事がジェノヴァのオリジナルに最初から含まれていたのだが、それが次々と転記される過程で省略されたり短縮されたりして徐々に抜け落ち、それによって今あるごとく種々に異なる版が存在するようになった、との正反対の結論に達した。

この結論そのものは、ベネデットの検証がもっぱら言葉の側からの文献学的な考証であって内容の側からの歴史的な実証を欠いていること、史実に反する記事の存在すること、彼の言う省略や短縮の原因と理由が十分に根拠付けられないことなどから、必ずしも全てそのままには受け入れられていないが、その研究自体、すなわち各種写本やテクストの対校と分析、その分類と位置付け、そして全体の系譜関係は精緻を極めた説得力あるものであり、その後の全てのマルコ・ポーロテクスト研究の基礎をなすものであった。以下ここでは、主に上記ベネデットの研究に拠りつつ他にユール、ムール[3]等と合わせて諸写本とテクストの全体を概観する[4]。

1　写本とテクスト

今に伝わる２百余の写本とそれらに基づく刊行テクストは、その形式と内容、すなわち用いられている言語と含まれている記事とによって、基本的に以下の七つの家族もしくはグループに大別される（括弧内は一般に用いられている略号）。１）フランス語地理学協会版（F）２）フランス語グレゴワール版（FG）３）トスカナ語版（TA）４）ヴェネト語版（VA）５）ピピーノのラテン語版（P）６）ラテン語ゼラダ版（Z）７）ラムージョのイタリア語版（R）である。内容の点では二つの大グループに分かれ、（１）から（５）すなわちＦ・FG・TA・VA・Ｐからなるグループ Ａもしくは Ｆ系と、（６）と（７）すなわちＺとＲからなるグループＢもしくはＺ系に分かれる。後者Ｂグループは前者Ａグループにない多数の記事を含むのに対して、前者の記事は後者の両方もしくはどちらかに全て含まれている。また、前者が内容的に基本的に互いに一致するのに対して、後者ＺとＲは相互に異なる記事を少なからずもつ。

１）地理学協会版（Ｆ）[5]

現存する20のフランス語写本のうち、パリ国立図書館写本 Ms.fr.1116（F）のみは極めてイタリア語がかった奇妙な独特のフランス語で書かれている。この稿本は1824年フランス地理学協会からルーの編纂で『旅行記回想録集』*Recueil de Voyages et de Mémoires* 中

に初めて刊行されたことから、地理学協会版 Geography Text と通称される。その序文には、同書は「1298年ジェノヴァの牢にて同囚のリュスタショー・ド・ピズに記述させた」とはっきりと記されてあった。それまで広く普及していたピピーノのラテン語版やラムージョのイタリア語版にはこの執筆者の名前はなく、そのことは一般には知られていなかった。そして1833年、その序文の冒頭の文章が同じ作者の名を冠したさる円卓騎士物語『ギーロン・ル・クルトワ』*Guiron le Courtois* の冒頭の文章と全く同じであることが、ポラン・パリスによって指摘された。こうして、作者の名前と冒頭の文章の一致により、マルコ・ポーロ旅行記もルスティケッロによって筆録されたものであることが確かなものとされた。その結果、それまではラテン語やマルコの母語ヴェネツィア方言が有力視されていたのが、1298年ジェノヴァで彼により編まれたという最初のものは、この Ms.fr.1116のような姿であったのではあるまいかと、一致して疑われるところとなった。

1928年上述の研究でベネデットは、そのルスティケッロの騎士物語の最も古い写本パリ国立図書館 Ms.fr.1463とこの Ms.fr.1116を綿密に照合し、冒頭の文章のみならず全編において語彙・表現・文体や場面・台詞・様式に至るまで基本的な一致を見せることを検証し、筆者が同一人物であることをさらに確かなものとした。語彙と語形においてイタリア語の影響を深くまた様々に受けている混合フランス語であるその文体を、まさしく千二百年代にフランス語で著作活動を行なっていたイタリア人作家のものとし、それを「フランク－イタリア語」と呼んで通常の正統フランス語と区別した。そして写本 fr.1116を、その筆録者の言語が基本的かつ体系的に放棄されずに残っている唯一のものとした。この文体の一致からまた、かの旅行記はマルコの口述するがままに筆記されたとの従来の見方を否定し、かなり完成度の高い豊富なメモやノートに基づいて、作家ルスティケッロが明確な構想のもとに十分な時間を使って自分の文体で筆録して完成させたものであると考えた。

しかし、この写本 F そのものは14世紀始めの数十年にイタリア（おそらくトスカナ地方）で作成されたものであり、誤り・崩れ・欠落・意味不明個所等のあること、同系統の他の稿本により古い良好な形の語句や文が残っている場合のあることなどから、これをジェノヴァのオリジナルとみなすことはできず、それ以前の段階があり、その間には複数の中間写本が介在していたと考えなければならないとした。いずれにしてもしかし F は、少なくとも言語的には現存写本のうちオリジナルに最も近いものであることには変わりなく、全てのテクストの基礎となるものである。

内容的には全234章からなり、序文から最後のノガイとトクタイの戦いの章まで揃った完本で、A グループの中ではもっとも長くかつ豊かである。そのテクストとしては、前述ベネデットの校訂になる出版の他、1982年にロンキによる独自の校訂版が刊行されている。また、1932年のベネデット自身の手になるイタリア語集成訳[6]と1938年のムールの英語集成訳[7]でも主底本として用いられている。

この特徴的な言語の装いを残すものとしては他に唯一、大英博物館コットン手稿 Otho D.v.（O：14世紀末）のあることが知られる。わずか２葉にまたがる断簡で、序文第１章と第20章の他はその間の章が大きく短縮されて残っているに過ぎないが、F と同じフランク－イタリア語で記されており、F 以外の唯一の証言として、いくつかの個所で F の誤

りや欠落を補う読みを提供する点で貢献する。

2）グレゴワール版（FG）

残りのフランス語写本のうち15は、前述Ｆとははっきりと異なる通常の正統なフランス語で書かれており、そのうちの一つパリ国立図書館 Ms.fr.5631（A[1]：14世紀後半）には最初に、「本書は私グレゴワールがマルク・ポル殿の書を作り直したものである」との一文があることから、グレゴワール版と総称される。構成と内容はＦとよく一致し、その結構忠実な再生といってよいことから、同じフランク－イタリア語で書かれていたＦの兄弟写本の１本（F[1]）がグレゴワールなる人物によって標準的なフランス語に書き直されたものと見られる。しかし、この人物については何も知られない。

ベルン市図書館 Ms.125（B[3]：15世紀前半）、パリ国立図書館 Ms.fr.5649（B[4]：15世紀中頃）、ジュネーヴ大学公共図書館 Ms.fr.154（B[5]：15世紀）の３写本には同書の作成にまつわる声明文があり、そこには、原本はフランスの騎士ティボー・ド・セポワがヴェネツィアで直接マルコ・ポーロから進呈されたものであること、それは同書の作成後最初のコピーであること、さらにそれから作ったコピーをティボーの死後息子ジャンが主君シャルル・ド・ヴァロワや友人に配ったこと、1307年８月に作られたことなどが記されてある。が、マルコから直接進呈されたかどうかは確認されないし、同書の最初のコピーであることもありえないと見られる。また上の日付も、ティボーが手に入れた元のコピーが作られた日付か、それともそれからグレゴワールが書き直した版の出来上がった日のものかは確定しない。いずれにしてもそれから遠くない時期に作られたことになる。ベネデットは、1307年８月の日付は元の写本のものであり、グレゴワールによるその訳は1308年と推定する[8]。

こうした由来の経緯から、この家族の写本はフランスで王侯貴族の間に広まり、華麗な細密画の挿絵の付いた豪華な羊皮紙写本が多い。またその共通するタイトルから、『驚異の書』Livre des Merveilles と呼び慣わされる。主要な写本として他に、パリ国立図書館 Ms.fr.2810（A[2]：15世紀初頭）、パリ・アルスナル図書館 Ms.3511（A[3]：15世紀末）、大英博物館王室写本 Ms.19D１（B[1]：14世紀後半）、オックスフォード・ボドリャン図書館ボドリャン写本 Ms.264（B[2]：14世紀後半）、ストックホルム王立図書館 Ms.XXXVII（C[1]：14世紀前半）、パリ・アルスナル図書館 Ms.5219（C[3]：16世紀）等がある。

言語的には、標準語への書き直しであるためフランス語としてより純粋で適切な表現となっているが、ルスティケッロの言葉と文体を伝えず、その特徴的な言い回し、慣用句、場面進行の文句などが削除されたり通常のものに置き換えられたり、訳者すなわちグレゴワールにとって理解の困難だった箇所が短縮・削除されたり誤読されたりしている。しかし、時により正確な読み、より好ましいヴァリアントを提供して、Ｆの欠落や誤りを補うものとなっている。

構成上は、いずれもＦの第202～206章で中断し、最後の28ないし32章分（中央・西アジアのモンゴル継承国家の歴史の部分）を欠く。しかし、その終わり方が唐突であることから、訳者や転記者の中断によるよりも落丁による可能性が高い。個々の部分では、恣意的な手直しや改変、記事の移動や省略も多い。

このFGテクストは、前述パリ国立図書館Ms.fr.5631を基本とし同Ms.fr.2810とMs.fr.5649を参照して1865年ポーチェによって刊行された。彼は上述の声明に絶対的な信頼を寄せ、「同書作成後最初のコピー」とあることから、ジェノヴァでルスティケッロによって書き取られたもの（F）は下書きであり、その出来具合に不満だったマルコが解放後ヴェネツィアで自ら良好なフランス語に書き直させた改訂版である考えた。しかし、内容的にFに劣ること、共通の誤りと欠落のあること、Fの言語が理解できなかったがゆえと思われる誤りが散見されることなどから、この書き直しにマルコが直接係わっていたことは否定的である。ベネデットは、マルコから直接かどうかは分からないが、同書の一コピーを手に入れたティボーが、そのフランス語があまりにも奇妙なものであったことから、それを贈呈すべき相手の自分の主君シャルル・ド・ヴァロワら王侯貴族のことを慮って、おそらくフランスで誰か、つまりグレゴワールなる人物に通常の正統なフランス語に書き直させたものであろうと見る。

FG稿本の一つ（A^{2}）は、早く1351年にサン・ベルタン修道院のベネディクト会士ジャン・ル・ロン・ド・イプルによって編まれた東方旅行記集に収められた。1875年のユールの英訳版はポーチェのテクストを基にしたものである。

3）トスカナ語版（TA）

F系Aグループに属するイタリア語写本は、いくつか孤立したものや後世の他版からの訳を除くと、トスカナ語版とヴェネト語版の二つの家族に分かれる。

古いトスカナ地方の方言で書かれた手稿本は、フィレンツェ国立図書館Ms.II.IV.88（TA^{1}：14世紀前半）、同Ms.II.IV.136（TA^{2}：14世紀）、同Ms.II.II.61（TA^{5}：1392年）、パリ国立図書館Ms.ital.434（TA^{3}：14世紀）、フィレンツェ・ラウレンツィアーナ図書館Cod.Ashuburnhamiano 525（TA^{4}:1391年）の五つが知られる。TA^{1}には、所有者ピエル・デル・リッチォによる1452年の書き込みがあり、「1309年に死亡した母方の曽祖父ニッコロ・オルマンニによってフィレンツェにて書かれた」と記されている。しかし、書き込みがかなり後年のものであること、その転記者についての確かな記録が何もないことなどから、同写本が1309年以前作かどうかは留保される。それにしても古い良好なトスカナ方言であることから、17世紀にクルスカ科学アカデミーの『語彙集』に採録され、「クルスカ稿本」とか「オッティモ 」Ottimo（最良）とも称される。

この写本のモノとしての古さや上のような事情から、原本のトスカナ語テクストはあるいはトスカナ地方ピーサの人であるルスティケッロのオリジナルだったのではないかと疑われたこともあったが、1827年これを最初に刊行したバルデッリ・ボーニによって、意味が分からずしてそのまま書き写されているフランス語彙の多いこと、地名や数量の単位がフランス語のままであることなどから、フランス語写本からの訳であることが証明された。FGと同じく、時にFよりも古い良好な読みを残していること、Fの誤りや欠落を補う場合もあることなどから、Fに近いフランク－イタリア語で書かれた一本（F^{2}）からトスカナ方言に訳されたものと考えられる。

内容的には基本的にFとよく一致するが、歴史や軍事に関する章がいくつか見られな

いほか、全体的に縮約され分量的にかなり減少している。最後はＦの第227章で終わっており、末尾の７章を欠く。代わってその後に、他版にはないまとめと結びの一文があり、世界諸地の事を述べ来たったがこれで本書を終わること、出立の後グラン・カーネのもとで過ごし数々の冒険の後ようやく祖国に戻ってきたこと、これほど広く世界を探索したものはマルコをおいて他にないことなどが書かれているが、これは訳者による最後のまとめと見なされる。訳は全体として忠実冷静であり、恣意的な展開や書き足しは少ない。しかし、個々の細部での省略・要約・短縮・変形、誤解や無理解から来る誤訳・不正確・意味のズレなどは数多い。

バルデッリ・ボーニの後、TA[1]はラザリ（1847年）、バルトリ（1863年）、オリヴィェーリ（1912年）、チックート（1981年）、ルッジェーリ（1986年）らによって繰り返し出版された。TA[1]より古い読みを残していると見られるTA[2]が、1975年ベルトルッツィ・ピッツォルッソによって刊行されている。1982年のロンキはその再版である。

1824年フランス地理学協会によってＦの付録として刊行されたラテン語写本パリ国立図書館 Ms.lat.3195（LT：14世紀）は、このトスカナ語テクストがラテン語訳されて後述ピピーノのテクストと混交したものである。

14世紀後半のフィレンツェの詩人アントーニォ・プッチ（1388年没）の『覚え書き』*Zibaldone*（フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館 Ms.Tempiano ２）中に、マルコ・ポーロ記の興味深い要約のあることが知られるが、地名の崩れ方や誤りが共通すること、同じ特徴的な語彙が使われていることなどから、その典拠はこのトスカナ語テクストであったと見られている。

４）ヴェネト語版（VA）

古いヴェネト地方の方言で書かれている手稿本のうち、Ａグループに属するものとしては、ローマ・カサナテンセ図書館 Ms.3999（VA[1]：14世紀前半）、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館 Ms.1924（VA[2]:15世紀前半）、パドヴァ市図書館 Ms.CM211（VA[3]：1445年）、フィレンツェ個人蔵（VA[4]：15世紀前半）、ベルン市図書館 Ms.557（VA[5]：16世紀）の五つが知られる。

これらの中ではVA[1]が一番古く、読みも正確かつ保守的で、この家族の祖本の姿を最もよく伝えるものとみなされるが、８葉からなる断簡で30章（Ｆの37-69章）ばかりしか残っていない。他の４本はいずれもかなり後世（15～16世紀）のもので、言語的にも内容的にもかなりの変貌をきたしている。その中ではVA[2]が比較的正確かつ豊かであるが、最初と最後を欠くうえ、途中でも長い記事の省略や併合が行なわれている。36葉からなり、Ｆの第33-189章を収める。テクストがいちおう全体的に揃っているのはVA[3]とVA[4]で、VA[3]は72葉からなり、途中いくつかの欠落と省略はあるがＦの第１-220章を収める。最後に転記者ヴィトゥーリ Vituri の結びと日付（1445年７月24日）がある。VA[4]のほうが古いが今は行方不明となっている。VA[5]はさらに後世のもので、欠落が多い。

マルコの故郷ヴェネト地方の方言で書かれているためオリジナルを疑われたこともあったが、1906年VA[1]を刊行したペラエズによって、それがフランス語テクストからの訳で

あることが証明された。しかし、TA と同じく時に F よりも古く良好な読みや語句を残していること、F の誤りや欠落を補うことなどから、F に近いフランク－イタリア語の一稿本（F^{3}）からヴェネト語に訳されたと考えられる。

内容的には、最後の部分でアジアのモンゴル国家の歴史の章（F の200-217，221-234）をそっくり欠き、ロシアなど北方地方の章（F の218-220）のみを保つ。それ以前の部分でも８章を欠く。記事の順序の入れ替えや章の合併も多い。

しかしこの版は、次のピピーノのラテン語版はじめいくつかの言語に転訳され、東方との商業上の結びつきが強く、また出版活動も盛んだったヴェネツィアで15世紀末から繰り返し刊行されることによって、歴史的には最も広範で息の長い影響を及ぼしたことで貴重である。

VA からのラテン語訳はピピーノ版のほかにもう一つ（LB）あり、アンブロジァーナ図書館 Ms.X.12.P.S.（14世紀前半）とヴァティカン図書館ヴァティカン写本 Lat.2035の２写本が残っているが、どちらも要約か断片である。TB と略称されるトスカナ語版は VA からの訳であり、フィレンツェ国立図書館パラティーノ写本 Ms.590（TB^{1}：14世紀後半）、ヴァティカン図書館キジァーノ写本 Ms.M.VI.140（TB^{2}：15世紀）ら６本が知られる。いずれも14世紀後半から15世紀のもので、訳は忠実でなく要約であるが、VA に特徴的な語句・表現・誤りを共有する。

ミュンヘン図書館の二つのドイツ語写本 Cod.696と Cod.252（D）はこの TB からのドイツ語訳であり、マルコの書の最も古い印刷本として知られる1477年（ニュルンベルグ）と1481年（アウグスベルグ）のドイツ語刊本は、それに近いドイツ語写本からと見られる。さらに、「様々な習俗と人々の書」Liber de morum et gentium varietatibus との共通のタイトルで知られるヴァティカン図書館バルヴェリァーノ写本 Lat.2687（15世紀前半）ら五つのラテン語写本も、VA のトスカナ語訳（TB）かそのドイツ語訳（D）からのラテン語訳（LA）である。アメリーゴ・ヴェスプッチの記録で知られるリッカルディァーナ図書館ヴァリェンティ写本 Ms.1910は、さらにこのラテン語訳からのトスカナ語訳である。

その他、「1465年３月12日ダニェロ・ダ・ヴェローナにより」との書き込みのあるルッカ国立図書館ヴェネト語写本 Ms.1296と、フィレンツェのマルチェッリーナ図書館に所蔵されているスペイン語印刷本（1518年５月16日セヴィリャ）のサンタエリャによるカスティリァ語訳テクストも VA からのもので、同一の稿本に基づいている。

VA の印刷本は、1496年のジァン・バッティスタ・ダ・セッサによるものに始まり、その後も17世紀末にいたるまで繰り返し出版された。しかしそのテクストは、最初にオドリーコ・ダ・ポルデノーネの東方旅行記の第１章が置かれ、マルコの旅行記は F の第８章に当たる箇所から始まるという奇妙な形になっていることをはじめ、誤り・省略・短縮・書き換えも極めて多く、通俗的な娯楽本の類であった。近代に入って20世紀始め（1906年）、前述ペラエズによってようやく VA^{1}が刊行された。VA^{3}は、1999年バルビエーリとアンドレオーセによって出版され、また2000年タカタによって印刷されている。

5）ピピーノのラテン語版（P）

ラテン語写本は、前述の俗語からのいくつかの翻訳とBグループのゼラダ手稿（Z）を除くとほぼ全て、ボローニァのドメニコ会修道士フランチェスコ・ピピーノによるラテン語訳（P）に由来する。マルコ・ポーロ写本の中では最も数多く残っているもので、約半数を占める。その多くは、要約されたり省略されたりして全体の一部しか保っていないが、比較的よく揃った古い良好なテクストの手稿本としては、ベルリン国家図書館 Ms.lat.968（P^{2}：14世紀）、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館 Ms.Riccardiano 983+2992（P^{9}：14世紀前半）、モデナ・エステンセ図書館 Cod.estense lat.131（P^{24}：14世紀前半）、パリ国立図書館 Nouv.Acq.lat.1768（P^{32}：14世紀前半）、ローマ・ヴァティカン図書館 Ms.Vat. lat.3153（P^{38}：14世紀）等がある。

最初に、ルスティケッロの序章にかえて自らの「序文」があり、同書の翻訳を引き受けるに至った経緯やラテン語訳の意義と目的が述べられる。その中に翻訳は上司から命じられたことが記されており、ボローニァでのドメニコ会総会は1302年と1315年に開かれていること、同修道士に関する記録の最後が1321年のものであることなどから、訳はその間に行なわれたことが推定される。また、同序文でマルコ自身と叔父マフェオの死（1310年）のことが触れられており、ピピーノはポーロ家と面識があったかそれに近い関係だったことが推測される。

写本の一つモデナ・エステンセ図書館 Cod.X.I.5（P^{25}：14世紀前半）中に、「ロンバルディア俗語から」訳したと記されていることから、典拠はまず確実にヴェネト語テクスト（VA）だったと考えられる。構成と内容もよく一致し、最後のアジア史の部を欠くこともそれを証している。しかし、今に残るVA稿本のテクストと比べて、誤りはより少なくまたより古く良好な読みを残していることから、この訳者が基にした稿本は今に残るVAの前述諸写本より良好なものであったとみられる。

ピピーノには他に長編の世界史『年代記』*Chronicon* があり、その中にもマルコの書からの記事が転載されているが、それらは現存P稿本に見られる簡潔なものと異なり、より忠実・詳細であることから、今に伝えられるPは最初の形ではなく、オリジナルはさらに正確で豊かなものであったことが推定される。

事実、Fと比べると現Pテクストは、前述の章の欠落のほか、全体的にかなり大きく縮約されて短くなっており、分量的にも主要テクストの中で最も少ない。その訳は、基本的には原典に沿っているが、全体として訳者の言葉で書き直されており、小さな加筆や修辞的な手直しもあることが指摘される。また、修道士という立場やその翻訳の目的からして、とりわけ信仰に係わる箇所において行き過ぎた介入のあることが明らかである。3巻への分割（Ⅰ：67章、Fの第75章まで、Ⅱ：70章、Fの第158章まで、Ⅲ：50章、Fの第159-194、218-220章）は、F系グループではピピーノ版のみの特徴である。

Pテクストからの俗語訳写本がいくつかあり、フランス語（2）、アイルランド語、ボヘミア語、ヴェネト語、フェルナンデスによるポルトガル語（1502年リスボン刊）、シモン・シュヴァルツによるドイツ語（1582年刊）を数える。このうちボヘミア語訳（プラハ博物館 Cod.III.E.42、15世紀）は今に伝わるP稿本より内容的に豊かで詳しく、これまた現存

テクストが原初の形より要約的であることを示すものとなっている。

さらにまた多くの印刷本があり、最初は1485年アントワープで出版されたもので、コロンブスがその一本を航海に携えたことで知られるが、内容的には誤りが多い。これの原本は、1949年岩村によって日本の国会図書館から復刻出版された。次いで1532年バーゼルでグリナエウス（実質的にはヨハン・フッティヒ）による『新世界』*Novus Orbis* 中に収録されて大きな成功を収めた。しかし、これらの刊本に用いられたテクストがどの写本のものであるかは特定されず、崩れた形を示していることからかなり後世のものと考えられる。その上、編者による手直しが目立つ。グリナエウス版はその後何度も再版され、1585年と1602年のライネック版、1671年のミュラー版でさらに広まった。

このグリナエウスの印刷本からの俗語訳としては、ドイツ語（1534年）、オランダ語（1563年）、フランス語（1556年）、カスティリァ語（1601年）、フランス語（1735年）等がある。

6）ラムージォのイタリア語版（R）

1559年ヴェネツィアで出版されたジァンバッティスタ・ラムージォ（1485 - 1557年）の『航海旅行記』*Navigazioni e Viaggi* 第２巻に、彼自身の手になるイタリア語集成訳が収められた。３巻に分かたれていること、章の欠落を同じくすること、加筆や誤りを共有することなどから、主底本はＰと考えられるが、それには見られない例えば名高いアフマド事件（1282年）やキンサイ（杭州）の詳細な描写など、数多くの興味深い記事を含んでいた。そのテクストに前置された長い解説の中でラムージォは、「150年以上も前に書かれた数種の写本」に基づいてマルコの書を訂正したこと、その一つラテン語写本は友人のギジ家から借りたものであることを記していた。彼はまた、そのラテン語テクストをジェノヴァでマルコ自身によって書かれたオリジナルと考えていた。

このラムージォのテクストはイタリア語ということもあって、広く普及していたピピーノ版の前に長らく等閑視されてきたが、19世紀に入ってようやく見直される。まずレッシングによってその重要性が指摘され、1818年にはマースドゥンが、内容的にはるかに豊かだという理由でその英訳の底本にこれを選んだ。トスカナ語テクスト TA[1] を出版した前述バルデッリ－ボーニも、同じ理由からその第２巻にこれを採録した。1875年のユールも、ポーチェのテクスト（FG）にはない記事をラムージォからとって付録とし、ラムージォが用いたというギジ家稿本の発見が急務であることを指摘した。また、それまでラムージォ自身による捏造か近代の旅行者から借用したものであろうと疑いの目で見られてきたそれら独自記事を、詳細正確で史実と合致するものが多いことからマルコ自身の手になるものと確信し、ジェノヴァからの解放後ヴェネツィアで書き加えたものが後に集められてラテン語に訳されたのであろうとみなした。

それまでにも、トレドの司教座聖堂古文書庫にゼラダ手稿と呼ばれるラテン語写本が存在し、そのテクストは書き出しがＰとは異なりＦに近いものであることが前述バルデッリ - ボーニによって1827年に報告されていたが、それ以上のことは知られなかった。1924年ベネデットはミラノのアンブロジァーナ図書館に、ジュゼッペ・トアルドによって1795年に作られたそれの忠実な模写（Ms.Y.160.P.S.）を発見し、そこにはラムージォの新記事

の大部分が見出されるのみならず、Rにもないさらに新たな記事が多数含まれていることを明らかにした。また、ラムージョが用いたというギジ家稿本（Z[1]）がその模写の原本であるゼラダ稿本（Z）の兄弟写本に間違いないことを確認した。そして1928年の前述彼自身の校訂になるFテクストの脚注に、そのゼラダ稿本（トアルドの模写）とラムージョテクストからFにない記事を全て補って出版した。

ベネデットによれば、Rにはギジ家稿本以外に、いずれも同じ系統に属する後述ソランツォ手稿（V）とフェッラーラ要約（L）、それにVAとは異なるもう一つのヴェネト語テクスト（VB）が用いられている。したがってRは、Pを基本としその枠の中にギジ家稿本はじめこれらの稿本からPにはない新たな記事を取り込むことによって、そのテクストを内容的にはるかに豊かなものとする一方、おびただしい誤りのみならず恣意的な書き換えの多い最も崩れたテクストであるVBを無批判に用いることによって、正確さと統一を欠くものとなっている。またラムージョ自身による加筆や手直し、それに訳文も集成訳であるため忠実とは言えず、自らの言葉で書き換えられているものが多い。

テクストに前置されているラムージョの三つの序文、とりわけその第一「偉大なるマルコ・ポーロ殿の書の冒頭の部分について」は、この旅行家についての多くの貴重な情報を含み、その後の全ての伝記研究の出発点をなしている[9]。テクストは、近年では1980年ミラネージによって再刊された『航海旅行記』第３巻に収録されている。

７）ゼラダ手稿（Z）

1932年、ゼラダ手稿の原写本（Z）がパーシヴァル・デーヴィッドによって上述トレドの大聖堂古文書庫に発見され、1938年ムールによってそのテクストが刊行された。それを、先に自分が発見した前述アンブロジァーナ図書館の模写と対校したベネデットは、その異なりはごくわずかなものでしかなく、したがってゼラダ稿本についての判断とマルコ・ポーロテクストに関する自分の説にはなんら変更すべき点はないとする[10]。

Zは、ローマにあったスペインのゼラダ枢機卿（1717 - 1801）の蔵書からトレドの司教座聖堂に移籍された紙写本で、それ自体の作成は15世紀後半、1470年頃と推定される。そのラテン語訳がいつ誰によって行なわれたかは一切不明だが、文体も内容もFとよく一致することからして、Fに近い一フランク－イタリア語版の忠実なラテン語訳とみられる。しかも、Fが誤っており他の版が正しい場合Zはその正しい方と一致することの多いこと、Fの疑問箇所や崩れた箇所がZで訂正できること、人名・地名がより正しく保たれていることなどから、Fよりも古くよりオリジナルに近い良好な稿本に基づいたことが推定される。訳者については、口蓋音gやcの代わりにzが用いられていること、マルコがMarcus Pauloと常に公式名で呼ばれていることなどから、ヴェネト人の可能性が高いとベネデットは推測する。

しかしその訳は、少なくとも現ゼラダ稿本では全般に及んでいず、とりわけ前半で省略と短縮が多い。最初の旅の経緯を述べた19章からなる序の部分はわずか数行に縮められ、「以下省略する」と明記される。その後の章でも省略する場合はetcと記される。これらの省略が最初の訳者によるものか、それとも後の転記者によるものかは断定できないが、

省略部分の前後で話の筋が通らない場合のあることなどから、最初は全訳だったのが後の写字生によって縮約された可能性が高い。一方、後半148章以降は全般にわたってFと同じ順序で訳されており、その訳はきわめて忠実であり、文体的にもよく一致する。

内容的には、Fと共通する記事においても時により豊かかつ詳細であり、その上Fにない記事や文章が長短あわせて200箇所以上ある。その中には、従来マルコの旅を疑う理由の一つとなっていたF系テクストに欠落している記事、カラ・ホトの描写、古い中国文明への言及、女性の「百合の足」（纏足）、あるいは福州のキリスト教徒（マニ教徒）の存在などが見られる。その5分の3はラムージョのテクストにも見出されるが、残りはZにしか見られない。一方、例えば著名なアフマド事件のようなRのみにあってZにない箇所は、Zでは前半省略が多いことからして、Zの典拠か原本にはあった可能性が高いと見られる。

F系グループ（A）のテクストになくZ（とR）にのみ見出される記事をいくつか共有することと、Fに対して典型的に異なる読みを同じくすることなどから、このZ系グループ（B）に属せしめられるテクストが他に三つある。

一つは、ソランツォ手稿（V）と呼ばれるベルリン図書館ハミルトン写本Ms.424a（15世紀）で、ヴェネト方言で書かれたテクストである。言語的にも内容的にもかなり崩れているが、Fの第1-219章に規則的に対応し、Zの新記事を22箇所で共有するのみならず、FにもZにもない箇所を30近く有する。したがってこれをベネデットは、Fに似たフランク－イタリア語テクストのラテン語訳からのヴェネト語訳か、それともそれらの混成訳であろうと推定する。

もう一つは、フェッラーラ要約（L）と通称されるフェッラーラ図書館Ms.Cl.II.336（15世紀始め）に代表される四つのラテン語写本で、Fの第1-226章が忠実に要約されている。要約者が理解できずしてフランス語がそのまま残っている表現のあることなどから、Fに極めて近い一フランク－イタリア語版にのっとってラテン語に要約されたものと考えられる。内容的には、FになくZ・R・Vと共通する記事を有するほか、これのみの記述も13箇所に及ぶ。RにはこれらVやLとのみ共通する箇所のあることから、ラムージョがこれらを典拠の一つとして用いたことが推定される。

さらにもう一つは、ヴェネツィアのコッレル図書館Ms.Donà delle Rose 224（1446年9月28日）ら3写本に残るもう一種のヴェネト語テクスト（VB）で、いずれも15世紀の作である。Fの言葉がそのまま残っている箇所のあること、誤りをFと共有することなどから、典拠はFに近いフランク－イタリア語版だったと見られる。しかし、FにないZ独自の記事を2箇所に留めていることから、その典拠はFよりもZのそれに近いものであったろうと推定される。もっとも、内容的にはそれの忠実な訳からは程遠く、翻訳というよりは自由な書き換えとも呼ぶべきものとなっている。Rには、上述のごとくこれから多くの箇所が採り入れられていることが跡付けられる。

Zのテクストは、上述ムールによるものの他、1998年バルビエーリによってイタリア語の対訳を付けて出版された。

8）その他

マルコがジェノヴァとの海戦で捕虜になったとの情報が記載されていることで知られるヤコポ・ダックィの『世界の姿あるいは年代記』*Imago Mundi seu Chronica* には、その後に21章からなるマルコの書の抜粋「ほとんど信じ難い事ども」(I) が続く。そのうち後半の12章は LB（VA のラテン語訳）からの全くの要約であるが、前半の９章には処女性の特徴としての全裸、母系制、聖職者の初夜権、多妻制など、今に伝わるテクストにはないきわめて興味深い記事が見られる。ベネデットは、これらがマルコの手になるものかは判定しがたいが、きわどい内容の記事であることから、宗教的配慮から削除されるとすればまずこのような性質のものではなかったろうかと疑う。そして、ヤコポの書が書かれたのが1340年代であることから、マルコのオリジナルには今に伝わるどの稿本にも見られぬような記事の含まれていた可能性を指摘する。

その他、以上の七つのグループのどれにも確実には分類できないものとして、１．カタロニア語版（K）とそのフランス語訳（K^1）ならびにアラゴン方言訳（K^2）の家族、２．ダンテ『神曲』の一写本に書き込まれているメオ・チェッフォーニの抜粋（1430-31年）、３．マルコから直接話を聞いて書いたというピェトロ・ダーバノの「哲学者ことに医学者の相違調停者」Conciliator differentiarum philosophorum precipueque medicorum（1303年）中の記事、が挙げられる。

以上、主要テクストの系譜関係を簡単に図示すると以下のごとくになろうか。

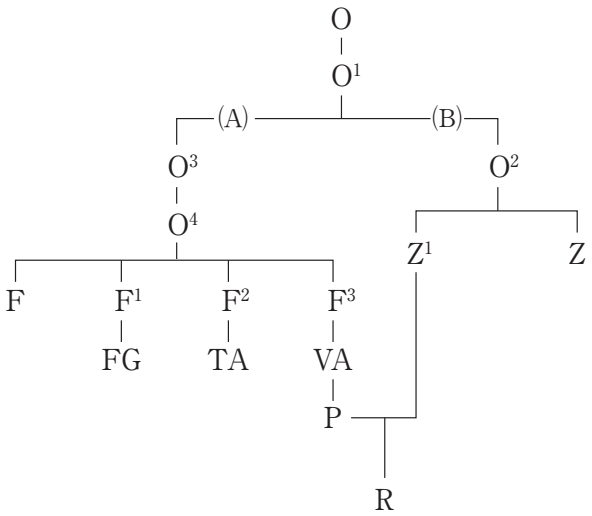

図１

2　写本・テクストの対校

2．1「歴代カアン」（第69章）

上に述べた七つの家族から代表的写本・刊本の同一箇所を取り上げて対校する。まず、第69章「チンギス・カアンの死後統治したカンについて述べる」冒頭の歴代グラン・カアンについての記事である[11]。（欧文イタリック体と和文斜字体はFと他の版との異なりを、［　］内は刊行本の校訂を示す。）

1）F：Bibl. Nationale de France, Ms.fr.1116（f29r.B31～ f29v.A13）[12]

Sachie tuti voiramant que apres cinchins[1] can fui seingnor[2] cui can, le tierçe bacui[3] chan, le quart alton[4] can, le quint mongu chan, le sexme cublai can, qui est le greingnor e le plus poisant que nei[5] fu nul des autres, car tuit les autres cinq fuissent ensemble ne auront tant de poir[6] cum cestui cublai. Et encore voç di *greingnor couse que le ie*[7] *voç di:* que tuit les enperaor dou monde et tous les rois de cristiens et de saraçin ne aont[8] tant poir[6] ne poroient il fair tant come cestui cublai grant chan poroit il fair, et ce vos mostrerai en nostre livre tout apertamant.

［Benedetto: 1 Cinghis　2 seignor　3 Batui　4 Oktai　5 ne　6 pooir　7 je　8 aront］[13]

「皆さん本当にご存じありたいが、チンギス・カンの後クイ・カンが君主となり、三代目はバクイ・カン、四代目アルトン・カン、五代目モング・カン、六代目がクブライ・カンであり、彼は他の誰がそうであったよりも偉大で強力である。というのも、他の五人が皆一緒になっても、このクブライほどの力は有さないだろうから。また、*今私が皆さんに述べているよりも偉大な*ことをお話しよう。すなわち、この世の全ての皇帝もキリスト教徒であれサラセン人であれ全ての王もかほどの力を持ってもいなければ、このグランカン・クブライができるほどのことをすることもできないであろう。で、私はそのことを本書において皆さんにすっかり明らかにするだろう」

ベネデットがフランク－イタリア語と呼ぶ、きわめてイタリア語がかったルスティケッロの独特のフランス語とはどのようなものなのか、このわずかな行にもよくうかがうことができよう。

標準フランス語との対照は次のFGに委ねることにして、いくつかの語のイタリア語形を挙げる：tuti/tuit － tutti＜皆＞、voiramant－veramente＜本当に＞、seingnor－signor＜君主＞、fu/fui － fu＜であった＞、cum/come － come＜のように＞、ie － io＜私＞、enperaor － imperator＜皇帝＞、nostre － nostro＜我々の＞、apertamant － apertamente＜はっきりと＞等。その最たるものがcouse＜こと＞で、イタリア語cosaとフランス語choseの混交したもの。greingnorはgrantの比較級古形greignorからである。

名詞・形容詞・冠詞等の性数の変化や動詞の活用も一定せず、また通常の規則から外れる：tuti－tuit－tous－tout、fui－fu、auront－aont等。これらおよび他の文法上の誤りや適正さを欠く語句がどのように訂正されるかは、次のFGに見られる。

これらは、ルスティケッロの不完全なフランス語の知識のせいのみではなく、実際の発音に近い語形となっており、ジェノヴァの獄でのマルコとの共同作業がどのようなものであったかを想像させる。文体にもそれはうかがえ、作者（ルスティケッロあるいはマルコ）が読者に語りかける形をとっており、例えばここの sachie que ＜ご存じありたい／いいですか＞や voç di ＜皆さんにお話しすると＞は全編にわたって常に用いられる他、この箇所には現れないが、e que voç en diroie? ＜で何を言おうか／でどうなったか＞、e porcoi voç firoie lonc cont ?＜どうして長話をしているのか／長話はさておき＞といった、話の進行のための冗句や強調表現が頻出する。こうした語句が、他の版では当然ながら徐々に省かれ整理されてゆくことは、これから見られる。

歴代カアンについては、初代チンギス・カンの後クイ（クユク）を第２代とし、バトゥをその中に数え、アルトン（フラグ）を第４代とする誤りが注目される。歴史に関するこうした誤りは他にも多く、もしこれがポーロによるものなら、自分の主君の直接の系譜に関わるものだけに、17年にわたってその側に仕えて重用されたとの自称に疑いの目を向けさせる根拠となる。

名前は、チンギスはここでは cinchins であるが、他の箇所では cinchis, cinghins, cingin, cingins, cinghis 等様々に綴られ一定しない。cui はクユク Cuyuc/Kuyuk の末尾音 -uc/-uk が落ちた形で、元史の貴由 Kui-yu と一致する。bacui はバトゥ Batu のことであるが、写本では c と t は同じように書かれ判別しがたいことが多いところからくる。alton は他版では alau/allau ＜フラグ＞かそれに類する形になっている。ベネデットはこれの -t- に注目し、原本では第２代のカアン‘オゴタイ’の名があったであろうが、allau がそれまでに２度出てきているため、それに引かれて写字生が書き換えたのであろうと考えて、Oktai と校訂する。が、音も綴りもかけ離れていること、第４代に置かれていることからしてもいささか無理であろう。alton は、allau の -l- を -t-、-au を -on に誤読した形で、やはりフラグのことである。ちなみにオゴタイは同書では一度も登場しない。

２）FG：Bibl. Nationale de France, Ms.fr.5631（f24v.A３-22）[14]

Sachiez tout vraiement que apres cinguins kaam[1] *qui fu leur primier seigneur regna* Cuy k., et le tiers bach[2] k., et le quart alaton[3] k., le quint mongu k., le sisiesme est Cublay k., *qui est seigneur et* le plus puissant des autres v *qui furent auant de lui.* Car se touz les autres v feussent ensamble ne auroient il tant de povoir comme cestui *a.* Encor vous di plus que se tuit li *crestien* du monde leur empereoures et leur roys feussent ensemble des crestiens et des sarrazinz n'auroient il tant de povair ne ne porroient tant fere comme cestui Cublay porroit, *le quel est seigneur de touz les tatars du monde, et de ceus de levant et de ceus de ponent, car tuit sont si*[4] *homme*[5] *et subgez a lui.* Et ce *grant pooir* vous monstrerai ie[6] en ce notre livre tout appertement.

[Pauthier: 1 kaan 2 Batuy 3 Alacou 4 ses 5 hommes 6 je][15]

「皆さん本当にご存じありたいが、*彼らの最初の君主であった*チングィンズ・カアンの後、クイ・

カアンが*統治し*、三代目はバク・カアン、四代目アラトン・カアン、五代目モング・カアン、六代目が*今の君主であるクブライ・カアンで*、*その前に君主であった*他の五人より強力である。というのも、他の五人が一緒になっても、彼が*有している*ほどの力はもっていなかっただろうからである。さらにまた皆さんにお話すると、たとえこの世の全ての*キリスト教徒*、キリスト教徒であれサラセン人であれその皇帝と王を合わせても、それほどの力をもっていなければ、このクブライができるほどのことはできないであろう。*彼はこの世の全タタール人、東のタタール人と西のタタール人の君主である。というのも、彼らは皆その民であり、彼に服しているからである。*で、その*偉大な力*を私は本書において皆さんにすっかり明らかにするだろう」

ルスティケッロのフランス語の語彙・語形・表現の訂正はほぼ全体に及んでいる：sachie → sachiez, tuti → tout, voiramant → vraiement, fui → fu, seingnor → seigneur, sexme → sisiesme, poire → povoir, cum → comme, dou → du, voç → vous, nostre → notre 等。greingnor は誤読されたのか、最初の方は seigneur ＜君主＞に変えられた。次の、et ancore voç di greingnor couse que le ie voç di ＜さらに私が今述べているよりも偉大なことを皆さんにお話しよう＞という奇妙な冗長な文は、encore vous di plus ＜またさらにお話しすると＞と整理されている。また、comme cestui a と動詞 a が、que se tuit li crestien du monde … と接続詞 se が、vous monstrerai ie と主語 ie（je）が補われて、文法的により適った文となっている。

書き換えはこうした言葉の訂正にとどまらず内容にまで及んでおり、*qui fu leur primier seigneur* ＜彼らの最初の君主であった＞、*qui est seigneur* ＜今の君主である＞、*qui furent auant de lui* ＜彼の前に君主であった＞といった小さな補足から、*le quel est seigneur de touz les tatars du monde* ･･･ *subgez a lui* ＜彼はこの世の全タタール人…服しているからである＞のごとき新たな一文まである。とりわけこの最後の文は、原本にあったのが F で省かれたのかそれとも FG の訳者か転記者によって書き加えられたのか、判断しがたい。しかしこの場合は、FG にしかないこと、既出の知識に属する内容補足的な性格のものであることなどからして、オリジナルにあったよりは後世おそらく訳者グレゴワールの加筆が疑われる。

一方、F にあって省略されているものは上の greingnor couse que le ie voç di 以外にない。これは他のどの版でも省かれる。tuit li *crestien* du monde ＜この世の全ての*キリスト教徒*＞は、後ろとうまく繋がらないこと、後で crestiens が繰り返されていること、F にはないことなどからして、転記時の何らかの混乱が推測される。

カアンの名では、F の batui が bach、alton が alaton とさらに崩れている。しかし、can ＜カン＞ではなく kaam（kaan）＜カアン＞、tartars ＜タルタル人＞ではなく tatars ＜タタール人＞となっているのが注目される。

カアンは古くテュルク・モンゴル系遊牧民の君主が名乗った称号カガン qaγan（可汗）に由来するが、後に最高君主を指すカアンとより低い君主・首長を指すカン（汗）とに分かれ、モンゴル帝国を建てたチンギスも一部族の長であったためカンであったが、第２代のオゴタイからは最高君主（皇帝）としてカアンと呼ばれた。モンゴル帝国の歴代の大君

を挙げるここは、カアンが相応しい。もっとも、他の箇所ではFでもcaan/chan等の形が使われていることからして、そうした区別が意識されていたかは疑問である。また、西のモンゴル諸国家では君主にカンが使われており、ここではバトゥやフラグが歴代の中に数えられていることから見ても、カンとカアン、それに加えてグラン・カン（大汗）の呼称の混在が、彼らの系譜の混乱の一因となったであろうことは想像に難くない。

タタールTatarとは、もとは中央アジアのテュルク系諸部族が東のモンゴル系遊牧民をその一部族タタル部の名にちなんで呼んだ語であったが、テュルク系と西で接するルーシ諸公国にも取り入れられ、1220年代のチンギス・カンの西征で襲来したモンゴル人を彼らはタタール人と呼んだ。それがヨーロッパにも伝わっていたが、続いて1240年頃バトゥに率いられて東欧辺境に突如として姿を現したモンゴル人を、イギリスの年代記作者マシュー・パリスは、その名の似かよりと恐ろしさから、ギリシャ神話の地獄の民タルタロスTartarosになぞらえてタルタル人Tartarsと呼び、それがそのままヨーロッパで通称として定着したものである。もっとも同写本でも、この辺りではtatarsであるが他の箇所ではtartarsの形も混在しており、これもその違いが明確に意識されていたかは疑わしく、意図せざる誤記によるものかもしれない。もう一つのFG写本Ms.fr.2810（A[2]）ではこの箇所でもtartarsである。最後の、タルタル人には東と西の二つの国があり、それぞれペルシャとロシアのモンゴル国家を指すことは先行の章に語られており、これは後の補足が疑われる。

3）TA：Bibl. Naz. Centr. di Firenze, Ms.II.IV.88（f21v.7-13）[16]

Sappiate veramente che apresso Cinghy[1] chane fu Cin[2] chane, lo terzo bacchia, lo quarto alcon, lo quinto mogui, lo sesto Cablau; et[3] questi a[4] piu podere: che sse[5] tutti gli altri fossoro insieme non potrebbono avere tanto podere quanto a[4] questo da sezzo *che oggi ae*[6] *nome gran chane,*[7] *cioe* Cablau. Et dicovi piu, che se tutti li singniori[8] del mondo, cristiani et saracini, fossero insieme, non potrebbono fare quanto farebbe Chablau chane.

[Ruggieri: 1 Cinghys 2 Cui 3 e 4 ha 5 se 6 hae 7 <e> 8 signori] [17]

「本当にご存じありたいが、チンギ・カーネの後チン・カーネ、三代目はバッキア、四代目アルコン、五代目モグイ、六代目がカブラウだった。そして、この者はより力を有している。というのも、他の皆が一緒になっても、今日*グラン・カーネという名のこの最後の者、つまり*カブラウが有しているほどの力は持てないだろうからである。さらに皆さんにお話すると、キリスト教徒であれサラセン人であれこの世の全ての君主が皆一緒になっても、カブラウ・カーネがするほどのことはできないだろう」

訳として素直であるが、要約とまで至らないにしても全体的に縮約されて短くなっているのが分かろう。FGに省略が一箇所しかなかったのに対して、ここではその他tuti、le greingnor、que ne fu nul des autresが省かれ、tuit les enperaor dou monde et tous les

rois は tutti li singniori[6] del mondo ＜世界の全君主＞と一まとめにされている。さらには最後の、et ce vos mostrerai en nostre livre tout apertamant ＜そのことを本書で明らかにする＞との文も省かれている。

一方、加筆は一切ない。唯一 che oggi ae nome gran cane ＜今日グラン・カーネという名の＞が、若干表現を変えて位置を移動させられているのみである。

語彙・文法は後に標準語となるトスカナ語で、podere（potere）, fossono（fossero）, potrebbono（potrebbero）, ae（ha）に古い形を残している。da sezzo ＜最後の＞は近代語では用いられない。

カアンの名は、F に対して cinchins → Cinghy, cui → Cin, batui → bacchia, alton → alcon, mongu → mogui, cublai → Cablau と全て変形している。ただしこの写本でも、Cin と Cui、alton と alcon は判別しがたく、どちらとも読める。また can が cane とイタリア語化している。これらの崩れ方からしていくつかの中間写本の介在が推測され、前述1309年以前の転写との TA[1] の覚え書きは留保とともに受け取られる。

4）VA：Bibl. Civica di Padova, Ms.CM 211（f24v.24-31）[18]

Dapuo *la morte de* chinchis fo segnior *di*[1] *tartari* chui chaam, lo terzo *segnior ave nome* Bachui chaam, lo quarto [2] e llo quinto mongu chaam, lo sexto chublai chaam, *el qual regnia mo*[3], e questo sollo a plui posanza che non ave tuti i altri zinque. E sapiate *per zerto* che tuti l'inperatori e re de cristiani e de saraini nonn a tanta posanza ni chusi grande *signioria*[4] dentro tuti chusi chome a Chublai *solo*. E questo ve mostrera el nostro libro veramente.

［Barbieri: 1 d'i 2 ＜･･･＞ 3 mo' 4 segnioria］[19]

「キンキス・カアンの*死*後クイ・カアンが*タルタル人*の君主となり、三代目の*君主*はバクィ・カアン*という名*で、四代目、五代目モング・カアン、六代目が*現在統*べ*ている*クブライ・カアンで、この者*だけ*で他の五人全部が持っていたよりも大きな力を有している。また*しかと*ご存じありたいが、キリスト教徒とサラセン人の全ての皇帝と王を皆合わせても、クブライ一*人*がもっているほどの力も*支配地*ももっていない。このことは、本書が皆さんに本当にお示しするだろう」

全体的に簡略化されて短くなっている点では、TA についてと同じことが言える。FG と TA では残っていた F の冒頭の sachie tuti voiramant ＜ご存じありたい＞がこの版からなくなっている他、car tuit les autres cinq ..... cum cestui Cublai; greingnor couse que le ie voç di; ne poroient il fair; tout apertamant 等、繰り返しや説明の語句はここでも省かれている。

一方 TA には一切なかったのに対して、ここでは小さな追加と書き換えが認められる：*la morte de* ＜の死＞、*di tartari* ＜タルタル人の＞、*segnior ave nome* ＜君主は･･･という名＞、*el qual regnia mo* ＜現在統べている＞、*solo* ＜一人＞、*per zerto* ＜しかと＞である。これらは FG と共通するものが多いことからして、VA の祖本（F[3]）は F よりも FG

のそれ（F[1]）に近かったのではないかと推測される。can ではなく caan/caan も FG と共通する。ただし FG の tatars はなく、tartars の通称が使われている。名前も chinchis, chui, bachui は FG と近く、TA よりは良好である。４代目の名が抜けていることが注目され、他の版の場合と合わせても、この名前には何らかの問題があったことをうかがわせる。

VA のヴェネト方言の語彙・語形に対する TA の対応語（または標準形）を示す（VA-TA）：dapuo – apresso, fo – fu, ave – ebbe, sexto – sesto, mo – adesso, sollo – solo, plui – piu, saraini – saraceni, ano – hanno, tuti – tutti, zinque – cinque, zerto – certo, chusi – cosi.

５）P：Bibl. Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992（f25r.B16～ f25v.A１）[20]

Primus igitur rex tartarorum fuit Chinchis[1], secondus Cui[2], tercius Bacui[3], quartus Alau[4], quintus Manguth[5], sextus Cublay[6] *qui modo regnat*, cuius potencia maior est quam fiunt omnium *praenoiantorum* v *praedecessorum* eius. Maius est etiam *solius* ipsius dominum quam sint simul in unum cuncta *regna et dominia* cristianorum regus et omnia saracenorum, sicut in libro hoc *suo loco* patebit manifeste.

［Itinerarium: 1 chynsis　2 cny　3 bacny　4 esu　5 monghu　6 gublay］

「タルタル人の*最初の*王はキンキス、二代目クイ、三代目バクイ、四代アラウ、五代マングト、六代が*現在統べている*クブライで、その力は*上述*五人の*前任者*皆よりも大きい。また彼*一人の*支配は、キリスト教徒と全てのサラセン人の王の*領土と支配*を一つに合わせたよりも大きい。そのことは、本書のその*箇所*ではっきりと明らかになるだろう」

FG は補足を、TA と VA は省略を伴いながらも、語彙と構文において基本的に F に素直に従った訳であったのにたいして、この P は全体として自分の言葉での要約的な書き直しとの感じを与える。この印象は全編を通じて一貫し、分量的にも主要７テクストの中で一番少ない。

構成上はやはり VA に最も近いが、そこではまだ残っていた途中の sapiate per certo che＜しかとご存じありたい＞が省かれる一方、tuti li altri cinque＜他の５人全部＞は omnium praenoiantorum v praedecessorum eius＜上述その５人の前任者たち皆＞と重々しく言い換えられている。また最後の、＜そのことを本書で明らかにする＞との言明は F・FG・VA ではいずれも＜私が皆さんに＞と一人称で語られていたが、ここでは patebit manifeste＜明らかになるであろう＞と三人称になっている。こうした変化は全編にわたって認められ、典拠の違いによるのではなく、宗教家向けに翻訳したピピーノの文体によると見られる。qui modo regnat＜ 現在統べている＞、solius＜一人＞、regna et dominia＜領土と支配＞などは F にはないが VA にあり、P の典拠がそれであることを示している。他版にないのは唯一最後の suo loco＜その箇所で＞のみである。

名前は、Mongu が Manguth と悪化する一方、VA では空白となっていた第４代に Alau の名が見える。これは、ピピーノの典拠が今に伝わる VA のそれより良好だったこ

とを示す一つの証拠となる。しかし他のPでは様々に異なり、もう一つの最も古い稿本として知られるモデナ・エステンセ図書館写本 Cod.Estense lat.131では空白、パリ地理学協会ラテン語版（LT）では Alau、1485年の最初の刊行本 *Itinerarium* では Esu、グリナエウスの刊行本（1537年）では Allau である。この Esu は次の R に登場する。

6）Z（この章を欠く）

7）R（p.135, ll.11-16）[22]

Doppo Cingis Can fu *secondo* signore Cyn Can; il terzo Bathyn Can; il quarto *Esu* Can; il quinto Mongú Can; il sesto Cublai Can, il quale fu piú grande e piú potente di tutti gli altri, *perch'egli ereditò quel che ebbero gli altri, e dopo acquistò quasi il resto del mondo, perché lui visse circa anni sessanta nel suo reggimento. E questo nome Can in lingua nostra vuol dir imperatore.*

「チンジス・カンの後チン・カンが*2代目*の君主だった。3代目バティン・カン、4代目*エスゥ*・カン、5代目モング・カン、6代目がクブライ・カンで、他の皆より偉大で強力だった。*というのも彼は他のカンたちが有していたものを継承し、約60年間統治の座にあって、その後ほぼ残りの世界を獲得したからである。このカンという名は、我々の言葉で皇帝という意味である*」

前半 di tutti gli altri までは、大きく短縮されているが基本的に他の版と変わらない。歴代カアンの名も、第4代に Esu というこれまでなかった謎の名前が現れる以外は、ほぼ共通する。ところが、後半 perch'egli 以下は他のテクストと全く異なる。もしラムージョ自身による補筆でないなら他の稿本から採られたことになるが、彼が拠ったというギジ家写本（Z[1]）からかどうかは、その兄弟写本であるゼラダ手稿（Z）にはこの章が欠けているため、確かめえない。R に用いられたとされる他の3テクスト、V・L・VB にもない。

内容から見ても、フビライが＜60年間統治の座にあった＞というのは事実（在位1260-94）に反するうえ、すぐ後の第77章で、「1256年に統治し始め1298年の今まで42年にわたっている」（F 他）、とあるのと一致しない。ただし、ラムージョのテクストには42年という数字はなく、代わりに「1256年27歳のとき統治し始めた」とあり、それから逆算したのかもしれない。これらからすると、歴史に関わる補足解説的なものであるだけに、ラムージョ自身による補いの可能性が高くなる。とりわけ最後の、＜このカンという名は･･･＞は間違いなくそれであろう。R にはこうした補筆が全編にわたって散見される。

注

1．Henry Yule & Henri Cordier: *The Book of Ser Marco Polo*, Amsterdam Philo Press 1975（London 1871, 1903-20）, vol. 1 p. 1［以下 Yule］.

2．*Marco Polo Il Milione*, prima edizione integrale a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo S. Olschki 1928［Benedetto］.

3．A.C.Moule & Paul Pelliot,*The Description of the World*, vol.I, New York AMS Press 1976

(London 1938)［Moule］.

4．以下、テクストの歴史と系譜については、Cfr. 拙稿[1]「ルスティケッロ・ダ・ピーサ―マルコ・ポーロ旅行記の筆録者」『大阪国際女子大学紀要』vol.24-２, 1998, pp.１-48.

5．以下、各写本と刊本については、Cfr. 上記ベネデット「序文：写本の伝統」Introduzione: La tradizione manoscritta, in Benedettoおよびその拙訳「ベネデット『マルコ・ポーロ写本』」(１～５), 『大阪国際女子大学紀要』voll.24-２～27-１, 1998-2001, 同（６）『大阪国際大学紀要国際研究論叢』voll.16-２ ～ 17-１, 2003.

6．*Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, tr. da Luigi Foscolo Benedetto, Milano-Roma,Treves-Treccani-Tumminelli 1932［Benedetto[1]］; その英訳 *The Travels of Marco Polo*, tr. by Aldo Ricci, London Routledge 1931［Ricci］; その和訳『東方見聞録』愛宕松男訳註、平凡社東洋文庫 1978［愛宕］.

7．Moule, pp.57-489.

8．Benedetto, pp.LVI-LX.

9．拙稿[2]「ラムージォ“マルコ・ポーロの書序文”（１）―マルコ・ポーロ伝記研究」『愛媛大学教養部紀要』vol.24, 1991, pp.53-106.

10. L.F.Benedetto, Ancora qualche rilievo circa la scoperta dello Z toledano, ≪ *Atti dell' Accademia delle Scienze di Torino* ≫ 94（1960）, pp.519-78.

11. 原写本には句読点はないが、必要に応じて付す。アクセント記号は付けない。人名･地名の語頭文字の大小は原本のままに写す。明らかな誤綴りもそのままに転記した。

12. Bibliotèque Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116［F］.（f29r.B31～ f29v.A13）は、第29葉表B欄（第２欄）31行から同裏A欄（第１欄）13行までを示す。Foto ①

13. Benedetto p.53。単なる綴りの校訂等は省く（以下同)。他に、Voyage de Marc Pol, *Recueil de Voyages et de Mémoires*, par la Société de Géographie, Tome I, Paris 1824［Societé］; *Le Divisament dou Monde*, a cura di Gabriella Ronchi, Milano Mondadori 1982［Ronchi-F］.

14. Bibliotèque Nationale de France, Paris, Ms.fr.5631［A[1]］. Foto ②. 他に、同 Ms.fr.2810（A[2]）; British Museum, London, Ms. Regio 19D１［B[1]］; Bodleian Library, Oxford, Ms.Bodleian 264［B[2]］.

15. *Le Livre de Marco Polo, citoyen de Venise*, par M.G.Pauthier, Paris Didot, 1865, pp.184-86［Pauthier］.

16. Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze, Ms.II.IV.88［TA[1]］. Foto ③. 他に、同 Ms.II.IV.136［TA[2]］.

17. *Il Milione*, a cura di Ruggero M.Ruggieri, Firenze Olschki 1986, p.155［Ruggieri］. 他に、*Milione*, con Indice ragionato di Giorgio R. Cardona, a cura di Valeria Bertoluzzi Pizzorusso, Milano Adelphi, 1975［Pizzorusso］; *Milione*, a cura di Gabriella Ronchi, Milano Mondadori, 1982［Ronchi-TA］.

18. Biblioteca Civica di Padova, Ms.CM 211［VA[3]］. Foto ④. 他に、Biblioteca Casanatense di Roma, Ms.3999［VA[1]］.

19. *Il Milione Veneto*, a cura di Alvaro Barbieri e Alvise Andreose, Venezia Marsilio, 1999, pp.156-57［Barbieri[1]］. 他に、*Marco Polo, Ms.CM*211 *della Biblioteca Civica di Padova*, a cura di Hideki Takata, Osaka International Univ. 2000［Takata］; M. Pelaez, Un nuovo testo veneto del Milione di Marco Polo, ≪ *Studi Romanzi* ≫ IV 1906 pp.５-65［Pelaez］.

20. Biblioteca Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992［P[9]］（Pの番号はMouleによる: pp.512-14）. Foto ⑤. 他に、Biblioteca Estense di Modena, Cod.estense lat.131［P[24]］.

21. *Manuscripts and Printed Editions of Marco Polo's Travels*, by Shinobu Iwamura, The National Diet Library Tokyo 1949, p.41［Itinerarium］. 他に、Marci Pauli Veneti,'De Regionibus Orientalibus', *Novus Orbis Regionum ac Insularum Veteribus Incognitarum*, pp.330-417, Basilea 1537［Grinaeus］; Andreas Mullerus: *Marchi Pauli Veneti, Historici fidelissimi juxta*

ac praestantissimi, de Regionibus Orientalibus, Georgii Schulzii 1671［Müller］; Marco Polo il Milione , con le postille di Cristoforo Colombo, tr. da Luigi Giovannini, Roma Edizioni Paoline 1985［Giovannini］.

22. Giovanni Battista Ramusio, I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanesi, Torino Einaudi 1980, vol. 3 pp.75-120［R］.

Foto ① F：Ms.fr.1116（f29r. B31 ～ f29v.A13）

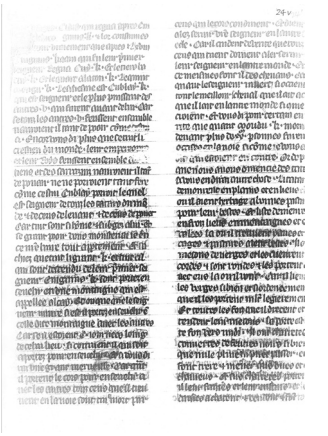

Foto ② FG：Ms.fr.5631（f24v. A 3 -22）

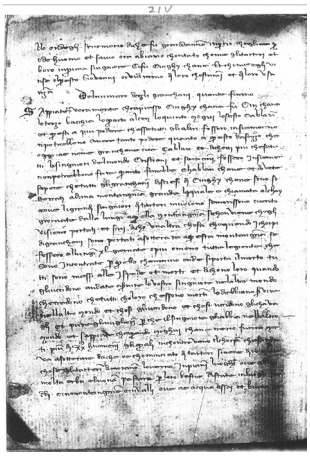

Foto ③ TA^{1}：Ms.II.IV.88（f21v. 7 -13）

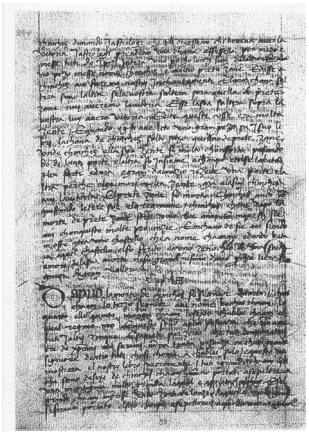

Foto ④ VA^{3}：Ms.CM 211（f24v.24-31）

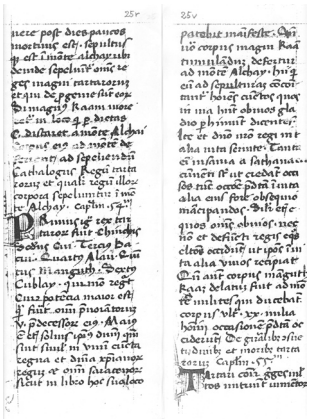

Foto ⑤ P^{9}：Ms.Riccardiano 983+2992（f25r.B16～f25v.A 1 ）